

視覚障がい

視覚障がいは、視力と視野の障がいがあります。

視力障がいに全盲と弱視があります。全盲の人は文字を読めないで、点字を読んだり、録音された音声を聞いたりします。全盲の人は視覚障がい者の2割程度と言われます。一方、弱視の人は見えづらさにも個人差があり、中には目の見える人と同じように印刷した文字や拡大した文字を読む人もいます。視覚障がいのある人が全員、点字を使えるとは限りません。

また、視野障がいは、目を動かさないと見たときに見える範囲が狭いことをいいます。目からの情報が得にくいと、音声や手で触ることなどにより情報を得ています。

困っていることを理解しましょう

一般に、目が見える人は情報の80%以上を視覚から得ているといわれています。視覚障がいのある人は、周囲の音やにおい、風の流れ、皮膚の感覚などの視覚以外の感覚を使って生活しています。一人で歩くこと、文字の読み書き、日常生活のさまざまな動作が

困難になります。また、音声による手がかりが的確に得られないと、周囲の状況を知ることが困難になります。歩くときは、白杖や盲導犬によって安全性を確認していますが、歩道に物が置いてあるなど、いつもと状況が異なるような場合や、慣れていない場所では一人で移動することが難しいです。

視覚障がいのある人が外出の際に最も不安に感じるのは、横断歩道を渡る時です。

音響式信号機など(21ページ)がない場合には、周りの人や車の音を頼りに渡ることになります。

視覚障がいのある人は、「あっち」「こっち」「そっち」などの指示語を使って説明されても分かりません。

白杖を持って
いる人は、全員が
全盲ではなく、弱
視の人もあります。



スマートフォンの画面を見ながら歩いている人(歩きスマホの人)とぶつかることがあります。
危険ですので、歩きスマホはしないようにしましょう。



こんなことに配慮しましょう

視覚障がいのある人が、何かを探していたり、不安そうな表情をしていたりなどの様子



物の位置を伝えるときには、直接手で触れてもらうようにしてください。

また、「あなたの右側」、「〇時の方向」など基準となる言葉を添えましょう。



であれば、まず声をかけてください。また、横断歩道前や駅のホームなどの危険な場所を歩いている場合には、ためらわずに声をかけてください。



盲人のための国際シンボルマーク



視覚障害者の安全やバリアフリーに考慮された建物や設備、信号機等の機器などに付けられているマークです。

社会福祉法人
日本盲人福祉委員会